# 探究をカリキュラム・マネジメントで

学びを実現するカリキュラム・デザインの中核に「総合的な探究の時間」を位置づける 新学習指導要領は〝探究モード〟 とされています。ここからは、既に取り組み始めている2校の事例をご紹介します。

、への転換とも言われ、また、教育目標や教科横断的な



# 探究をコアにした横

浦河高校(北海道・道立)

# 生徒を育むために 主体的に考え行動する

立大学進学から就職まで幅広い。 報・ビジネスなど5系列を擁する同校 再編統合により、普通科から生まれ変 には、多様な生徒が通う。 進路は国公 わった総合学科高校だ。 2012年度に近隣の商業高校との 択肢が少 北海道日高地方にある浦河高校は ないなか、 、人文科学や情 周辺に高校の

としてより効果的に機能させていく必 学習」に近い内容だったため、総合学科 学では課題研究も行っていたが、「調べ ?な学習の時間 産業社会と人間(産社)と総合 、同校の課題とされていた (総学)の充実だ。 総

部長の佐藤友洋先生はこう語る。

切です。 がるよう、産社や総学を変えていくこ るようになってほしい。 自分の可 たものを受け入れるだけでなく、自ら 社会で生きていくには、誰かが用 自慢の子どもたちです。しかし、現代 とが不可欠でした. 「本校の生徒は非常に素直で純朴で もっと主体的に考え行動でき '能性を広げていくことが大 その実現につな

産社や総学を個別に見直すことでは 業」の2年間の研究指定を受託。これ 28 ない。吉瀬献策校長は、一カリキュラム・ を活用して同校が取り組んでいるのは 年度 同校は国立教育政策研究所「平成 指定教育課程研究指定校事

要があったという。キャリア・ガイダンス

マネジメントの視点による学校全体の

べての分掌を総括する位置付けに変 進 携しながらスピード感のある改革を推 の取り組みを指揮し、教務部などと連 更されたキャリア・ガイダンス部が全体 改革」であることを強調する そのための組織変更も行われた。 してきた。 す

べての教育活動の基盤であることを 指す生徒像)と、 教員全体で共有した。 |努力|に基づき、 標の見直しだ。校訓「自主」「敬愛」 改革の第一歩となったのは学校教 ・能力を策定(図1)。これがす 、その達成に必要な9 、改めて教育目標

目

現に向けた教育課程の中核であると 総学については、目指す生徒像の



キャリア・ガイダンス 部長 佐藤友洋先生

校長 吉瀬献策先生

図1 浦河高校の校訓と学校教育目標 必要な資質・能力 ●物事をよく見て理解し、自ら考え正しく判断す **①**関心・意欲・態度 自主 るとともに、主体的・協働的に探究し行動す ②知識·技能 学 学校教育目標(目指す生徒像) ることができる生徒。 3思考力、判断力、表現力 ●自他の人権や生命を敬い尊重する精神を持 4想像力 校訓 ち、多様性を認め合いよりよい人間関係を形 6協働性(対話力) 敬愛 成することができる生徒。 ⑥社会性 ●望ましい自己実現のため不断に資質・能力 7達成感、満足感 標 努力 の向上に努め、豊かな地域づくりに参画しよ 8自己肯定感、自己有用感 うとする意欲を持つ生徒。 ⑨実行力、継続力、体力

取材·文/藤崎雅子



# 図2 3年間の探究活動の概要

学年	1年次	<b>&gt;</b>	2年次		$\Rightarrow$	3年次
教科	産業社会と人間 <sup>(2単位)</sup>		総合的な学習の時間 (2単位)			総合的な学習の時間 (1単位)
授業名	Expanding Time		インターンシップ	Expanding Time 2		Expanding Time 3
研究 テーマ	【教科・科目】 各教科から提示されたテーマの なかから、自分の興味・関心に基 づいて研究テーマを選択し探究		【 <b>就労</b> 】 就労に関するテーマを設定 (インターンシップで調査・ 検証)	【世界】 基礎テーマ(※)のなかから 興味関心に基づいてテーマを設定し探究		【地域】 基礎テーマ (※)のなかから興味関心に基づいてテーマを設定し、地域を対象として探究
テーマ 例	●数学→黄金比/三平方の 定理/パズル ●社会→北海道の地誌/憲 法/アイヌ民族 ●家庭→日高の食/保育の仕 方/アイヌの被服		●仕事と出産の両立は可能か ●外国人と協働するには? ●障害者雇用の実態について	<ul> <li>基礎テーマ「資源」→「山間地域に適した発電方法について」</li> <li>基礎テーマ「観光」→「グリーンツーリズムの可能性」</li> </ul>	•	<ul><li>●基礎テーマ「地域の資源」→ 「北海道の漁業の可能性に ついて」</li><li>●基礎テーマ「地域の観光」→ 「浦河vs様似」(対決スタイル のガイドブック作成)</li></ul>
活動	個人	-	個人	グループ		グループ

※=2年次は2018年度より、3年次は2019年度よりSDGsの17の目標を基礎テーマとする



浦河の魅力発信に取り組ん だ3年生のポスター。

## 図3 活動評価票の例

_			erpann	報信が推				
	ステップス 研究課業		1	1	1.1	ETPRINT	4-9-2-1	
2	取りの日本日に対する事業の手具 ができている	取り組む課題に対する事業 の予測が確実にできている		取り回た情報:: NY 448 の予算(2月35 で) 457 中介である。	和小田の開催に対する報告 の予算がない。	200 00 200 000 000 2000	4-3-2-1	
	なが、その課題におり終むのかと いう情報点が、明確で何をすべき かが申されている	があったい様とを収点が、 ではないますべきかをかし でいる。	調像になり他む意味点が、 他も明確で何をすべきかま がしている。	課職に取り締む情報点が、 概な明確だが、同志すべき かを示していない。	無数になり他とを明点が 根据でなく、同ますべきから がしていない。	(100-00 (100-00 (100-00 (100-00)	4-9-9-1	
	国際電子に向けた水域などが内閣 に終されている	部間様実におけた手造や 手出などが開催におされて 1/6。		開始をおこのけたを含む を高などからおにあるれて いない。	連絡を決に向けた手造や 手出などが導きれていな した	042-483-883	4-2-2-	
	保険で予想にたことが確認である。 適場的な方法を考えている	保護で予想したことが検証 できる、指導的な方法を検 機に考えている。	を設て予想したことが検証 できる。独物的な方法を報 を考えている。	新技で参加したことが検証 できる。独領的な方法の考 えがボナセである。	仮装で予想したことが検証 できる、施理的な方法を考 まていない。	2017-20 2017-201-221	4-9-9-1	
	181		<b>日本の根本 あまめ</b> 5	(注動などを収入する)				
	5月14日(月)5~6間	A STATE OF THE STA				を下評価値目 ①正規性(場合・金田・地産) で対談・技能 ②記者力・利助力・表変力 必定権力 ら記者性・社会性 を実行力・機能力・体力		
	6月14日(木)5~6種							
	6月21日(木)5~6間							
	6月28日(木)5~6個							

なげる狙いだ。 とどまらず、具体的なアクションへとつ に基づくことで、単なる疑問の解消に 育をみんなに」のような明確なゴール 利用。「貧困をなくそう」「質の高い教 の2年次からは、基礎テーマにSDGs 習活動にグループで取り組む。 2」では、 (持続可能な開発目標)の17の目標を 2年次後半の「Expanding Time 、社会課題に関する探究の学 今年度

る役割を踏まえ、2年次までは世界も 課題に取り組む。地域を支える人材の 出につなげるという同校に期待され の流れで、グループで地域(道内)の 3年次「Expanding Time 3」も同

マは、

、生徒に戻して再検討させる。

なか

も

あるが

、単に突き返すだけでなく

には再提出を4~5回

繰り返す場

践をスタートさせた。 年間の体系的なプログラムとして再編 分析、 セスを中心とし、産社も組み込んだ3 、④まとめ・表現という探究のプロ 16年度から全年次で一斉に実

# 探究を発展的に繰り プログラムを体系化 返す

生徒は4つの探究の学習活動に取り 1年次の産社と2・3年次の総学で

関

べて立てた仮説の検証を行う。 アリングや現場調査も行い、事前に調 仕事の体験だけでなく、働く人へのヒ テーマを設定。インターンシップ先では 立は可能か」など、働くことにまつわる に個人で取り組む。「仕事と出産の両 ンシップを組み込んだ探究の学習活動 2年次前半では、3日間のインター

る 共通だが、テーマや求めるレベルは異な 組 (**図** 2)。 む。 それぞれの基本的なプロセスは

づけた基礎テーマを学校から提示し、そ 方と宇宙科学や自動車技術などとの えば、数学を選択して「折り紙の考え 設定して個人活動として取り組む。 れを参考に生徒が各自の研究テーマを 「Expanding Time」では、 !連」について探究するといった具合だ。 1年次産社の一部を利用して行う 教科に関連

課題の設定、②情報の収集、③整理

位置付けを明確化。その内容は、①

徹底サポート 生徒自らのテーマ設定を トをまとめた。

の工夫について、探究の学習プロセス ごとに見ていこう。 探究の学習活動を実践するうえで

べればすぐ答えが見つかるようなテー ア・ガイダンス部が二重に審査。 組み込むなどしている。また、生徒があ 問作りのワークショップ (ハテナソン)を るようにするには、教員の指導力が極 る部分だ。 げる研究テーマは、担当教員とキャリ め方を示したり、4月の教員研修に質 指導の手引きを作成して基本的な進 めて重要となる。そのため、教員用の 題の設定)は、同校が特に力を入れてい まず、最初の研究テーマの設定 生徒が自らテーマ設定でき 少し調

ると、 へのインタビューなどの調査を行い、 備えについて住民アンケートや町役場 けた。また、別のグループは、災害時の 広報誌に掲載してもらうよう働きか 地域の魅力を調べて記事を作り、 を食い止めるための広報戦略を検討。 少の問題に対し、高校卒業後の町離れ 社会の課題に取り組む。活動例をあげ えて狭め、3年間の集大成として地は 視野に入れてきた活動を、3年次であ 避難所の課題と対策についてのレポ あるグループは浦河町の人口減 地

# 図4 単元配列表(2018年度・1年次の例)

年次ごとに、全科目の主体的・協働的な授業がどの時期に実施されるか、1つの表になっている。 縦の点線で繋がる項目は、科目横断の連携授業。

教科名 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 本文をもとに意見を書く 自分の意見を書き、話す 国語総合 意見を書く 違いを知るたる のIグループ 活動 選挙制度 (模擬選挙 障害者体験 【家庭·福祉】(調 共生社会に関して ポスターセッション【資・発】 現代社会 集合と命題 (論理思考) 2次関数 (手続き思考) 数学IA データの分析 蒸留・同素体などの 実験 化学基礎 体力測定データの 男女共修選択 (器械運動) 体育 Excel集計【情報】 健康の保持増進と疾病の予防【調】 6 保健 精神の健康 ジョブリサーチ (職業観、探究初学) 産業社会と 自己理解 論理的 学習成果 探空学習 論理思考 人間 (宿泊研修 思考講座 選扔 合唱 リコーダーアンサンブル 作曲活動 音楽I 静物デッサ 色彩学の 美術I VTS ポスターの制作 立体周の制作 フェナキストスコーブ 9 10 書道I 異文化交流· 年賀状作成【情報】 11 コミュ英語I 自己理解 (エゴグラム) 共生社会 【家庭·福祉】 12 家庭基礎 音声 体力測定データの Excel集計【体育】 異文化交流 13 社会と情報 使い方 年賀状作成【英語】 学校祭に向けての グループワーク 体育大会に 生徒意識調査 14 IHR 情報検索の方法 向けて



公民科と福祉科の連携授業 障害者体験を通じ、ダイバーシティや 福祉の在り方について考える。



革語科と商業科の連携授業 英語で年賀状を作成。今年度は1年 次英語科・商業科(情報)の連携で 実施予定。

を 沂 を照するよう指導 隣の図書 検索だけで終わらせるのでは 館と連携 がして幅 また、 地域から 広い文

面 必要に応じてキャリア・ガイダンス部 「情報の収集」の段階では I談してサポ インター

う。 講 校外に出 講座 師

業を行い  $\sigma$ 析 前半に こうして収集した情報の には 積 、ベン図や座 論理 他教科 的に活用 的思考方法 だする。 標軸 整 理

の

同

校の産社・総学は、

目指す生

徒

実現に向けた教育活動の総

抵括地.

点

置 月 話 年

別

に並べ、

、その中心に産社・総学

|いたものだ (図4)。

[的で深い学びにつながる学習内 次ごとに全教科・科目の主体的

どの をもてるようにしている。 連 重 には 分たちの するだけでなく、 ンス」 するイベントがあれば 視 後に活動を 外部からの ゃ 毎 活動 「太平洋・島サミット 価値があるか 年2月に学習発表会を が全国的 「まとめ・表現 「IBLユースカンフ 評価を受けること を ・世界的には 参加を促 知 る機 など す 開 る

関

を

ることで、 テップで何ができるようになることを **図**3 ーブリックを取り入れた活動評 使って 指しているか こうした探究プロセスの区切り この活動評価票によって '生徒が自己評価に取 指導と評価の一体化を図 教員も共通に理解す i) 組むむ 価 、各ス には

> 共 祉 さ

0)

目

教科を横断 **元配** 列表を作成 した授業を促

進

計 作

なくてはいけない

|というやら

『科目連携すると生

徒 さ

挑

も注目したい。 徴として、単元配列表の取り組みに !校のカリキュラム・マネジメントの 同校の単元配列表 学びが深まる』と前向きに捉えて 感ではなく

を招いて環 を設 [掛けてフィー けるほか 境や福祉 生徒も積極 ルドワークを行 などに関 的 d

徐々に使いこなしていくという。 らさまざまな授業場面で用いる ・科目も連携しなが などの思考ツ に関する 年次産社 授

うな 活動の充実に向 け 語 す 期 語 と効果的かが見えてくる。 ながる学習をいつどのように組み込 では産社・総学の探究の学習活動 し 日 ようになった。 てより効果的 位 総合の授業を前提として発 に合わせて 総合では産 常の授業では意識されにくい 単 一授業を実施し、 置 カリ 元配列表があれば 付けけ キュラム全体 られるが 社の学習 「自分の な指 かう取り組みができ 一方の 導をする。 各教科 意見を で探究の学 成果発表の 、各教科 注産社では 例えば 書き 科 この 表に · 科 目 しか

玉

目

つも始 また、 より 生社 校に送るといった |科が連携 せた。 科目間の連携の動 また、 画 成 英文の年賀状を制 する 英語科と商業科 (まった。 会を考える授業を実施した。 例えば昨年度は が L 実 単元配列表は前年秋に 《際に年度が始 障がい者体験を通じて 、新たな連携がいく きも大きく前 情報 作 公民科と福 :して海 )の協 ま 外 働

外の 、単元配列表は産社・総 連携も行われるという。 学以 外

高

習

向 玉 話 時 対



# 図5 生徒アンケート結果(2017年度)

項目	1回目 4月	<b>2回目</b> 12月
ボランティア活動や地域のイベント(行事)などに積極的に参加している	2.45	2.90
地域や世界との関わりについて考えたり、行動している(しようと考えている)	2.88	3.24
多様な生き方(進路)に関する情報について、主体的に収集・分析することができる	3.05	3.39
主体的に自分の生き方(進路)について、考え行動することができる	3.23	3.56
課題解決のために、計画的に行動することができる	2.93	3.25
日々の生活のなかで、自ら課題を発見し、課題を克服(しようと努力)することができる	3.14	3.44
どんなことも勉強になると考え、積極的に行動している	3.03	3.32
状況に応じて、進路を軌道修正することができる(しようと考えている)	3.20	3.49
自分の考えを論理的(筋道を立てて)に説明できる	2.96	3.24
大人の話に疑問点があったら、質問したり訂正したりする	2.98	3.22
自分の能力(自分が何を知っていて、何ができるか)を客観的に把握している	3.17	3.39
状況に応じて、感情や行動をコントロールできる(怒りやいら立ちがすぐに顔や態度にでない)	3.15	3.36
課題を解決する方法を試行錯誤しながら探ることができる	3.25	3.46
自分の可能性を信じている	2.84	3.02
相手の立場や考えを理解し、発言や行動する	3.40	3.53
保護者や教員の言っていることに間違いもあると思う	3.38	3.51
年齢や性別が異なる相手とも協力して行動することができる	3.40	3.52
自分の置かれている状況を理解し、その場に応じた発言や行動ができる	3.34	3.45
何事も大人や教員から言われたとおりに、行動するほうが良いと思う	2.09	2.15
わからないことやできないことは、そのままにする	2.03	1.94

※あてはまる4点・ややあてはまる3点・あまりあてはまらない2点・あてはまらない1点として調査し、平均値を算出。 1回目と2回目で増加ポイントの大きい順に並べ替えたもの。主体性・積極性に関わる項目を太字で示している。

# 図6 浦河高校コアルーブリック(2018年度)

	(評価指標)						
校訓	評価する能力	4 3 2					
自主	関心・意欲・態度	物事のあるべき姿と現状のギャッ プについて把握し、意欲的に解決 策を模索している。	物事のあるべき姿と現状のギャッ ブについて把握し、解決策を模索 している。	物事のあるべき姿と現状のギャッ ブについて把握しているが、解決 策を模索していない。	物事のあるイブについて記		
	知識・技能	知識・技能を統合・比較し、新しい 知識・技能を築ける。	知識・技能を統合・比較ができる。	知識・技能を身につけている。	知識・技能を る。		
	思考力・判断力・表現力	自分の考えをまとめ、他の考えと の共通点や相違点等を他者に分 かりやすく表現できる。	自分の考えをまとめ、適切に表現 できる。	自分の考えをまとめられる。	自分の考えを		
敬爱	想像力	経験や常識とつなげながら、筋道 立てて予想ができたり結論を導き 出したりすることができる。	筋適立てて予想ができたり結論を 導き出したりすることができる	知識や経験をもとに見通しをもつこ とができる	勘や当て推動 る。		
	協働性	自分の役割や責任を理解し、他者との 協働や交流を通じて、リーダーシップ やメンバーシップを発揮しながら行動 できる。	自分の役割や責任を理解し、他者と協 傷的に行動できる。	自分の役割や責任を理解し、行動でき る。	自分の役割やいる。		
	社会性	自分と異なった考え方や行動をする人たちがいる多様な社会を理解 し、行動することができる。	自分と異なった考え方や行動をする人たちがいる多様な社会につい て、理解している。	自分と異なった考え方や行動をする人たちがいることを理解してい る。	自分と異なっ る人たちがい している。		
	達成感·滿足感	自分の定めた目標を達成し、演足 感を感じている。	自分の定めた目標を達成すること ができた。	自分の定めた目標を持っている。	自分の定めだいる。		

のではなくシステムとして根付かせる

ことも、これからの課題となる。

「カリキュラム・マネジメントは、一部

まざまな実践を、

、教員個人の力に頼る

カリキュラム・マネジメントに基づくさ

また、2年間で立ち上げてきた同校

5)。特に、「地域の活動への積極的 考え・行動」など、積極性や主体性に ほとんどの項目で上昇がみられた(図 12月のアンケート結果を比較すると いてできているかを聞いた、昨年4月と に表れている。20項目の行動・態度につ ^加」や「自分の生き方への主体的 進路決定への取り組み方も今までと どの自己推薦書には、探究の学習活動 諦めずに挑み続けて最後は希望の職 言って進学したり、重なる不採用にも は異なる。昨年度、単に資格取得のた 大幅に増加。それが入学者選抜に良い の内容や成果を自ら記入する生徒が めではなく探究の学びを楽しみたいと

いでしょうか」(佐藤先生

生徒の自己評価が大幅アップ 積極性、主体性に関する 戦する先生方が増えている証拠ではな

感じている手応えは、データにも明確

変わってきたという。教員が日常的に 性に課題があった同校生徒の様子が 2年間の学校改革の推進のなか、主

関する項目が伸びている。

いという生徒も少なくありませんでし るようになったのは、自分で考え行動 体的に探究の学習活動の経験を書け た。それが今、多くの生徒が非常に具 影響があったのではないかという。 「これまでは何を書いていいかわからな

決定が目立つように。また、大学な に就いたりと、強い意思をもった進

(佐藤先生

# 全教員で取り組んでいく システムとして定着させ

や学校行事、クラス運営などにおけるル 今後は、これを基盤として各教科・科目 像への到達度の基準を具体的に示した。 ーブリック)を作成(図6)。目指す生徒 力についての「コアルーブリック」(コモンル 頭に、学校目標に紐づく9つの資質・能 そのひとつとして佐藤先生があげるの 仕組みを整備することだ。今年度初 さらなる進化に向けて課題もある。 、目指す生徒像に向かうための評

ーブリック作成も進めていく計画だ。

きたいですね」(吉瀬校長) よって変わっていきます。目の前の目 育実践は永遠ではなく、時代の変化に 教育目標を空で言えるような状態を 誰かではなく全員で取り組むもので に向けて邁進すると同時に、長期的 (育の方向性も見据えて対応してい 「指していきます。 そのために、まずは全教員が学校 しかし、必要な教

先生方に広がってきたと感じています\_ 性は間違っていないのだという認識 く感じた3年次担当者を中心に、方向 してきたからこそでしょう。それを強